

Title	インドネシア・ブギス-マカッサル社会におけるシリ(恥-名誉)を核とする行為集団に関する一考察
Author(s)	岩田, 剛
Citation	アジア・アフリカ地域研究 = Asian and African area studies (2008), 8(1): 75-88
Issue Date	2008-09
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/80120">http://hdl.handle.net/2433/80120</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

---

---

研究創案ノート

---

---

インドネシア・ブギスーマカッサル社会における  
シリ（恥一名誉）を核とする行為集団に関する一考察

岩 田 剛\*

A Study of the Concept of “Shame–Honor” Among the Bugis–Makassar, Indonesia

IWATA Go\*

This essay aims to explore the concept of “shame–honor” in Bugis–Makassar society in South Sulawesi, Indonesia. The concept of “shame–honor” is known locally as *siri* and is noted by scholars to be one of the most important cultural values for the Bugis–Makassar people. In previous research, *siri* has been mostly discussed in male–female relationships, especially in regards to elopement or as the motive for numerous murders. Little research has been conducted about the role of *siri* in other forms of social relationships in Bugis–Makassar society.

This essay attempts to clarify and show the importance of “*maseddi siri*” (“unite in *siri*”), a phrase that encourages people to join together in groups to defend their honor. Using historical facts and newspaper articles, the essay will show how these action groups can form at different levels (kinship, neighborhood, transmigrants, guerillas, ethnic groups, and kingdoms) for different purposes. The paper will also show that people in Bugis–Makassar society can “unite in *siri*” according to their specific situations.

1. は じ め に

本論の目的は、「恥一名誉」と訳されてきたインドネシア・ブギスーマカッサル社会のシリ  
の観念との関連で発現する社会関係の範囲について考察することにある。

シリ *siri*<sup>1)</sup> はブギスーマカッサルの価値規範の根底にあるとされる。そして、ブギスーマ  
カッサル人自身が自らの文化や過去の歴史をたたえるさいに、背景としてシリがしばしばとり  
あげられる。しかし、以下にみるように、シリに関しては、これまで、男女関係や殺傷事件と  
の関わりから、またシリが関わる社会関係の範囲については家族親族において作用する点を中

---

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

2008 年 5 月 7 日受付, 2008 年 9 月 5 日受理

心に議論がなされてきた。つまり駆け落ちを契機として親族の範囲においてたちあらわれるシリに関する考察が大半をしめ、シリが関わるより広い社会関係の範囲についてはこれまでほとんど考究がなされてこなかった。

シリがブギスマカッサル人にとって規範体系の根本にある概念であるならば、それは親族以外の範囲においても作用するものなのではないか。そうであるなら、シリとの関連で発現する社会関係はいかなる範囲におよぶのか。この点を考察するために、以下では、これまでのシリに関する議論を概観したうえで、その限界を指摘したい。そして、歴史上の出来事や新聞記事からあつめた具体的事例の検討をとおして、シリが作用する社会的様態をより包括的に理解するための手だてを考えたい。

本稿ではブギスとマカッサルという異なる民族集団を一括りにしてあつかう。これはシリという文化価値が両者に「共通」しているとの認識にもとづく。ブギス人はスラウェシ（セレベス）島南半島部の中・北東部に主に居住し、約 327 万、マカッサル人はおもに半島の南部に居住し、約 198 万の人口をかぞえる [Leo Suryadinata *et al.* 2003: 27].<sup>2)</sup> また、相当数のブギスマカッサル人がホームランドを離れ東南アジア島嶼部の各地に移り住んでいる。南スラウェシは北部をのぞいて 17 世紀初頭にイスラーム化しており、現在ほぼすべてのブギスマカッサル人がイスラームを信仰する。

## 2. シリとはなにか

ここでは、まず、シリの意味をのべておきたい。シリはブギスマカッサル人にとって価値規範を律する観念とのべたが、一般には「恥」とも「名誉」とも訳される。シリをもたないことは、しばしば「人間性の欠如」、「動物に等しい存在」などと形容され、シリを傷つけられた者はそれを回復することがもとめられる [Errington 1977: 44; マトゥラダ 1980: 330-332; Andaya 1981: 15-17; Pelras 1996: 206-208 など]。また、シリは人生における原動力であり、移住や競争の場において成功を促す力でもあるという [Hamid Abdullah 1985: 52-66]。

次に、辞書においてあげられているシリの意味を記しておきたい。以下、原文にはない番号を《 》であらわす。

まず、Matthes の『ブギス語—オランダ語辞典』<sup>3)</sup> では、siri' の意味として、《1》恥

1) 語尾のアポストロフィーは声門閉鎖音。先行研究では siri', siriq, sirik, siri と表記されてきた。

2) この数値は、2000 年に実施された国勢調査にもとづく。南スラウェシには、ほかにトラジャ人（約 70 万人、キリスト教徒が大半をしめる）や、マンダル人（約 48 万人）などが居住する [Leo Suryadinata *et al.* 2003: 27]。

3) 言語学、文献学を専門とした編者の B. F. Matthes (1818-1908) は、オランダ聖書協会の派遣で 1848-80 年にかけて南スラウェシに滞在した。マカッサル語とブギス語への聖書翻訳作業のかたわら、辞書作成や貝葉文書の蒐集をおこなった。なお、ブギス語に関しては、1978 年にジャカルタの国立国語研究所から『ブギス語—インドネシア語辞典』[M Ide Said 1977] が出版されているが、Matthes の辞書を質量ともに凌ぐ辞書は今日にいたるまで刊行されていない。

(beschaamd), おどおど (schroomvallig), 《2》羞恥 (verlegen), 《3》屈辱 (schaamtje), 《4》名誉 (eergevoel), 《5》不面目 (schande), 《6》嫉妬 (wangunst) があげられている。また、マカッサル語の siri' も同義であると付記されている [Matthes 1874: 724].

次に、Cense の『マカッサル語—オランダ語辞典』には、《1》恥 (beschaamd), 《2》面目をうしなう (zich te schande gemaakt gevoelend), 《3》羞恥心 (schaamte), 《4》名誉 (eergevoel) という意味があたえられている [Cense 1979: 707].

さらに、現地の学者の La Side は、ブギス人にとってのシリの意味と理解の概略をのべた論考のなかで、シリ (siri) の意味として次の7つをあげている。1. 羞じらい (malu-malu), 2. 恥 (malu), 3. 畏敬 (seگان), 4. 侮辱／恥辱 (hina/aib), 5. 嫉妬 (dengki/iri hari), 6. 自尊心／名誉 (harga diri/kehormatan), 7. 道徳 (kesusilaan) [La Side 1977: 25-28]. これらは、Matthes のブギス語辞典に載っている意味とほぼ同じである。

以上から、シリは狭義においては「恥」と「名誉」と理解されているものの、より厳密には「羞恥」「屈辱」「嫉妬」「畏敬」「道徳」など幅広い意味を含むことばであることがわかる。ただし、近年では人びとのシリの理解は変化しつつあり、都市部では若者の97%、住民の37%がシリについて広義の「恥」の意味を与えているとの調査結果があるという [伊藤 1993: 236].

シリのことが語られるとき、同時にプッセ pessé (Bug.) / パッチェ paccé (Mak.) がシリと切り離せない概念としてしばしば言及される。<sup>4)</sup> プッセ／パッチェは一般に「他者に対するあわれみ」と理解され、シリと相互補完的な概念とみなされている。『マカッサル語—オランダ語辞典』、『ブギス語—オランダ語辞典』では「苦衷、苦味」(scherp, bijtend van smaak) [Cense 1979: 112; Matthes 1874: 155], 『ブギス—インドネシア語辞典』では「苦い」(pedas) という意味があげられている [M Ide Said 1977: 152]. Mattulada はプッセを「悲しみ」(pedih), 「苦い」(pedis) と定義し、シリよりも一段階低い観念であるとのべている [Mattulada 1995: 63]. ただし、プッセ／パッチェのみが単独で語られることはほとんどなく、かならずシリといっしょに使われるとあってよいであろう。

### 3. 先行研究の概観

シリについての先駆的研究としては、Chabot による研究があげられる。彼は、慣習法調査の行政官として1942年初めの日本軍上陸までと、戦後1950年までの時期にマカッサル農村にてフィールドワークをおこなった。そのモノグラフ [Chabot 1996 (1950)] は、現在にいたるまでブギス・マカッサル社会を対象とする人類学や地域研究の古典的著作でありつづけている。

---

4) Bug. はブギス語, Mak. はマカッサル語, Ind. はインドネシア語をあらわす。以下同様。

彼は、女性の地位の侵害が当該の家族親族のシリをもっとも傷つけ、その報復として死の制裁が加えられるとのべた。そして、女性の地位の侵害として、マカッサル語で *silariang* と呼ばれる駆け落ちに焦点をあてた。また駆け落ちの種類や具体的事例、また婚前交渉とシリの関わりを論述した。以下、その概要をしるす。

駆け落ちが起こった瞬間から和解の瞬間にいたるまで、駆け落ちをおこなった男女とそれを追う女性側の家族親族は、「過ちを犯した者」*tumanyalla* (Mak.) と「シリを侵害された者」*tumasiri* (Mak.) の関係に入る。Chabot は駆け落ちのために娘が逃避行を敢行したときの彼女の家族親族の対応について、つぎのように描写している。

娘が逃避行を決行するのは、ふつう、黄昏時だ。水浴び場に出かけるなどと（家族に）疑われないような適当な言い置きをして、娘はそのまま家から逃げ出すのである。夕闇がその姿を見えにくくする。（中略）娘の逃避行が家族に明らかとなると、（家族の）若い男連中がただちに行動をおこす。彼らは、近所を尋ね歩き、武器をたずさえると、追跡を開始する。彼らはまず親族の家をまわってシリを伝える。これは親族（の男性）に対し娘の追跡に加わるよう要請することを意味する。応援を頼まれた者は、名誉を失うことなしにそれを断れない。「恥の感情がなければ、どこかで借りてきてまでもて」とはほんの一瞬でもためらいをみせた者に対して投げかけられる常套句であり、有無をいわず追跡に加わることがもめられる。そして、一定期間探してもみつけれないときにのみ、彼らは 1 人また 1 人と家へと戻ってくるのである [Chabot 1996: 240, ( ) は筆者が書き加えたもの。以下同様]。

もし女性側の男キョウダイが駆け落ちした男女をみつけた場合、彼らを捕まえて故郷の村まで連れ帰り、家族親族の「恥」をそそぐべく死の制裁を加えることになる。いっぽう、駆け落ちを決行した男女は追っ手からの追跡を逃れるため、集落長や有力者、宗教指導者の家に逃げ込もうとする。これらの人物の家で「過ちを犯した者」を刺殺することは非礼の極致とされるからである。このように、駆け落ちはそれをおこなった男女と女性側親族のあいだに深刻な緊張をもたらす。しかし、なんらかのきっかけで関係修復がはかれるときは、まず娘の男キョウダイにコンタクトをとる。最終的には、父親が娘と相手の男との婚姻に同意した時点で、「過ちを犯した者」と「シリを侵害された者」との関係は解消される [Chabot 1996: 238-239]。

Chabot が調査した時点において、すでに都市部では以上のような状況は変化しつつあった。教育機会の拡大によって学校に通う女子が増加し、男女が接する機会が増えていたからである。都市部では、駆け落ちがとくに若者のあいだで増加する傾向にあったものの、それに比して刺傷事件は減少する傾向がみられた。しかし、駆け落ち＝悪、婚姻儀礼・披露宴を経た結

婚＝善という観念は依然として根強かったという [Chabot 1996: 244].<sup>5)</sup>

Chabot の研究で強調されているのは、シリは女性のセクシュアリティに関わる部分において強力に作用するということである。ここでは、なかでも、駆け落ちに焦点があてられ、駆け落ちにいたるプロセス、「過ちを犯した者」と「シリを侵害された者」の関係とその修復をはかる動きなどがしめされた。<sup>6)</sup> Chabot 以後のシリに関する研究も、基本的には Chabot の記述にそうかたちでなされた。

マトウラダは、駆け落ち婚は「男の家族からの結婚申し込みが拒絶されたり、女の家族が提示した結婚費用の額が余りに高すぎたりする場合に生ずる」とのべている。そして後者については、通常、婚資 (sompā, Bug.; sunrang, Mak.) が高いことよりも結婚に関わる費用が高いことによって駆け落ち婚が生じるという [マトウラダ 1980: 325-326].<sup>7)</sup>

Millar は、婚姻儀礼に個人の社会的位置づけがもっとも顕現されると論じ、女性（とくに娘）は家族親族のシリを象徴する存在であるからこそ、その地位の侵犯は大きな「恥」を喚起するとのべた [Millar 1983: 484]。Millar の指摘をふまえて、Davies は、今日においても一般に女性は家族親族のなかで大切に護られるべき存在であり、とくに若い娘は家族の男性成員によって用心深く監視され、行動も制限されるとのべている。それはつまるところ、家族親族においてシリの問題が起こらないようにするためである [Davies 2007: 36]。

ここで、シリに関わる典型的な事例として、1980年代前半に南スラウェシ中部のボネ県で起こった県知事殺害事件を [Brawn 1993] から紹介する。

ある朝早く、礼拝の準備をしていたボネ県知事が自身の所有する丁子畑で働く農業労働者 L に刺殺された。L の妻も県知事の家で家事手伝いとして働いており、彼女も事件当時 L と共謀していた。また、偶然その場に居合わせた県知事の夫人も犠牲となった。この事件の背景は公にはされなかったが、人びとのあいだでは、県知事は当時高校生だった L の娘と婚外性交渉をおこない、そのシリが殺害につながったと噂された。また、L の娘は妊娠しており、県知事の処置で、他県の高校に転校させられていたという。事件後、L は妻とともに州都ウジュン・パンダン（当時、現在のマカッサル）に逃れ、そこで警察に逮捕された。<sup>8)</sup>

ブギス社会では一般に下位の者が上位の者の地位を侵害することは、その逆より罪深い行為

5) 駆け落ちについては、その比率も言及されている。Chabot が調査をおこなった村落において、1948～1949年の1年間におこなわれた107の婚姻のうち、19組が駆け落ち婚によるものであった（18%）。また、その前年のゴワ県全体では1,492件の婚姻のうち、283件が駆け落ち婚によるものであった（19%）。半島南端部のジェネボント地方ではこれらよりさらに高い数値であるとの報告があるという [Chabot 1996: 241]。

6) なお、Chabot はシリを犯された女性側親族の反応を中心に記述しており、男性側親族の反応についてはふれていない。関係修復、婚外交渉についても、その種類等については詳しくのべていない。

7) 濱元によると、近年では高騰する婚資を支えないことによって、男女の家族が合意のうえで駆け落ち婚するというかつてなかった現象が広くみられるようになったという [濱元 2004: 21, 65]。

8) なお、L は呪術能力に長け、ボネで警察にみづかりそうになったとき、ヒツジに化け、その追っ手をかいくぐってウジュン・パンダンまで逃れたという。

とみなされている [Errington 1989: 181]. したがって、雇われ者が社会的地位も高い人物である雇い主を殺害したことはセンセーショナルであり、地元の人びとのあいだでもたびたび話題にのぼったという。また、被害者である県知事がスマトラ出身のバタック人、すなわち「よそ者」(tau laing, Bug.) であることが強調され、地元の習慣をよく理解していないことが事件につながった、とも語られたという [Brawn 1993: 133-147]. 娘の地位を侵害したことによってその家族のシリを傷つけ、報復として娘の父親が相手の男性を殺害するという、シリを発端とする典型的な事例といえる。

Rusly Effendy は、1972 年から 1975 年までの期間にウジュン・パンダン市で発生した殺人と暴行傷害の件数と、それらのうちシリが動機となったものの件数を明示した。それによると、上記の 4 年間の殺人事件の 53%、暴行傷害事件の 30%が、シリを動機として発生している。<sup>9)</sup> また、期間内において、暴行傷害件数は年々増加する傾向にあり、殺人件数も 1975 年をのぞき増加の傾向がみられた [Rusly Effendy 1977].

伊藤は、インドネシアの国家警察資料をもとに、インドネシアにおける犯罪件数の状況をしめし、南スラウェシにおける殺傷事件が他州に比べて頻発していることを統計的に明らかにした。<sup>10)</sup> 具体的には、殺人発生率 (10 万人あたり) は、インドネシア平均が 0.55 なのに対し、南・東南スラウェシ管区が 3.17 とインドネシアでもっとも高い値であった。また、加重暴行傷害の発生率 (10 万人あたり) はインドネシア平均の 7.06 に対し 19.72、暴行傷害の発生率 (10 万人あたり) はインドネシア平均の 8.86 に対し 22.04 であり、いずれもインドネシア平均を大きく上回った [伊藤 1993: 228].

ここまでみたように、これまでのシリに関する議論は、男女問題の文脈や、殺傷事件等の刑事犯罪が関連する部分を中心におこなわれてきた。こうした議論は Chabot 以来、その後の研究でも基本的に彼の記述にもとづくかたちでなされたといえよう。

#### 4. 「シリでまとまる」に関する議論とその限界

前節でみたように、シリに関するこれまでの議論は、第 1 に男女問題がからむ親族関係の文脈、第 2 に殺傷事件等の刑事犯罪が関連する部分、において集中的におこなわれてきた。確かに、今日においても駆け落ちを中心とする女性の地位の侵害に関わる問題は、当該の家族親族にとっては大きな恥の問題といえる。近年出されたブギスマカッサル社会を対象とする民族誌や地域研究の論文においても、この点が指摘されている [伊藤 1996: 104-105; Nurul Ilmi Idrus 2005; Davies 2007: 35-40]. また、マカッサル発行の新聞やタブロイド判をみる限りでも、今日においても婚外性交渉 (不倫、婚前交渉) やそれをめぐっての殺傷事件の記事が

9) なお、犯罪動機 (シリ) の分類については、その基準は明らかにされていない。

10) 警察管区区分による統計データを用いているため、東南スラウェシ州の数値も含んでいる。

紙面を賑わせている。したがって、今日においてもシリをめぐるステレオタイプの語りが続り返されているといえるだろう。

しかし、本稿の冒頭でふれたように、シリがブギスマカッサルの価値規範の根底にある観念であるならば、親族の範囲のみならず、より広い文脈においてシリが作用しているのではなからうか。数は少ないが、一部の研究者は、シリが親族以外の社会関係においても作用することを指摘している。

Errington は、1970年代後半に南スラウェシ北部のルウ地方でブギスの貴族層を中心にフィールドワークをおこない、彼らの王権に関する研究をおこなった。そのなかで、ブギス人の人間関係は、他者を「身内」(kapolo, Bug.) か「他人」(tau laing, Bug.) かを区別することが基本だとのべている。その区別のコードとなるのがシリであり、「シリでまとまる」ことのできる者が「身内」であり、シリを共有できない者は「他人」だという。「シリでまとまる」はブギス語で maseddi' siri' と表現される [Errington 1989: 142-144].<sup>11)</sup>

「シリでまとまる」集団についての事例として、彼女はつぎのような逸話を記している。ある日貴族出自の地元有力者（オプ opu）の家の前で乗り合いミニバスの運転手がちょっとした騒ぎを起こした。それは、ミニバスが近所の男の乗ったバイクを追い越しぎわに、水しぶきをかけたことにはじまった。バイクの男はミニバスを止め、運転手にどなりつけた。すると、近所から男たちが駆けつけ、バイクの男に加勢しはじめた。何人もの男にすごまれたミニバスの運転手は男たちに許しを乞うて、その場はおさまった [Errington 1989: 148].

Errington はここで、あるインフォーマントの「(バイクの) 男が感じたシリはみんな同じだった」という言葉を引用し、オプのシリを共有する者たちがよそ者のミニバス運転手に対して行動を起こしたとのべている。つまり、よそ者である「他人」がオプの家の前で起こした無礼行為に対して、オプの庇護を受けている「身内」の者たちが、「シリでまとまった」といえる。別言すれば、このとき、まとまったシリは、オプの庇護を受けている、すなわちオプをパトロンとしている人びとの範囲であった。

Millar は、シリがもっとも明白にたちあられるのは、親族家族内の成員の地位が脅かされたときであって、親族家族をひとつにまとめるシリは結束なるものが存在するとのべている [Millar 1989: 30-31]。そして、親族家族内でシリを共有する範囲はキョウダイ、両親、配偶者、子どもであり、血縁関係が遠くなるにしたがって共有するシリは度合いも減少していくという [Millar 1983: 484]。また、Hamid Abdullah は、娘が駆け落ちした場合、1) キョウダイの男性（とくに長男）、2) 父親、3) もっとも近いイトコ（第1イトコ）の男性の順にまずそ

11) Errington が調査をおこなった地域のことば (Tac 方言) では、mamesa siri' と表現される [Errington 1989: 144]。なお、Errington の民族誌はルウの王権概念についての考察であり、シリを主題としてとりあげているわけではない。



の「シリ」(恥)をそそぐことがもめられるとのべている [Hamid Abdullah 1985: 38-39].

Millar の指摘は、親族の範囲においてシリがおよぶ範囲とその強弱の程度に言及しており、シリが親族を結集させるコードになりうると明確に言及している点でも興味深い。しかし、Millar の指摘も Hamid Abdullah の指摘も、シリの集団性の範囲は親族にとどまっており、それ以外の社会関係は考慮されていない。

Pelras は、これまでの自身のブギス研究の集大成である [Pelras 1996] のなかでシリに言及し、これまで議論にそって、シリが婚姻にまつわる事柄においてもっとも強く作用し、駆け落ちをめぐる殺害も起こりうるとのべている。しかし、同時にシリは個人レベルにおいて作用する感情であるだけでなく、集団的な感情でもあり、集団結束のしるしでもあるゆえに、ブギス人が社会生活や社会的成功を追求するさいに中心的なモチーフとなり、多くの文化人たちがシリを徳目としてたたえると言及している [Pelras 1996: 207]。この Pelras の指摘は重要である。しかし、シリが作用する社会関係については、具体的な事例にもとづく議論が展開されていない。

以上でみたように、先行研究では、シリが親族関係以外の社会関係の文脈でも作用していることが示唆されているものの、この点に関する具体的な資料にもとづく研究はほとんどおこなわれてこなかった。

## 5. 「シリでまとまる」— 歴史上の出来事や新聞記事等から

以下においては、ここまでのべたような先行研究の検討から浮かびあがってくる問題点を念頭におきながら、男女関係や刑事犯罪とは直接的な関わりをもたない文脈におけるシリや、シリとの関連で発現する社会関係の範囲についてのべる。その目的は、シリが作用する社会的様態をより包括的に理解するための手だてを考えることにある。

まず、戦争の際にたちあられる集団の例として、マカッサル戦争 (1666-69 年) とカハル・ムザカルの反乱 (1951-65 年) を例にとりあげたい。

### 事例 1 マカッサル戦争

17 世紀後半、ブギス人のアルン・パラッカ<sup>12)</sup> はマカッサル戦争においてオランダ東インド会社とともにマカッサルのゴワ王国を倒し、南スラウェシにおける政治権力を掌握した。歴史学者の Andaya は、彼の戦いをシリにもとづいて説明している。

---

12) Arung Palakka (1635?-96). ソッペン地方の貴族出自。1660 年末頃ゴワ王国に追われるかたちで南スラウェシを脱出、ブトン島でオランダ人と合流し協力関係を築いた。マカッサル戦争においては、ボネとソッペンの連合軍を率い、おもに陸上戦でゴワ軍と闘った。この戦いに勝利後、1672 年に Sultan Sa'aduddin として第 16 代ボネ王に即位した。

第1に、彼が幼少時代にゴワ王国のマカッサル人に傷つけられたシリを一生忘れなかったことが彼の人生における原動力となった。1640年頃、ボネ王 La Ma'darëmmëng は周辺のブギスの国々（ワジョ、ソッペン、マセペ、サウィット、バチュキキ）にイスラームの厳格化を強制した。それらの国から助けをもとめられたゴワ王国は1644年ボネに侵攻、制圧した。これにより、ボネはゴワの属国から奴隷国という地位に転落し、ボネのすべての貴族が段階的にマカッサルへの移住を命じられた。このなかに11歳のアルン・パラッカもふくまれていた。Andaya は、アルン・パラッカはこの時代にボネやソッペンのブギス人が虐げられる光景を目にし、ゴワに「シリ」を傷つけられたことが、生涯ゴワへの反感をもち続けた所以であろうとのべている [Andaya 1981: 39-42, 51-52].

第2に、ゴワ王国に虐げられたボネ王国の民衆のシリをアルン・パラッカがそそいだ [Andaya 1981: 154]. そして、アルン・パラッカは自分とボネを助けてくれたオランダ東インド会社に生涯忠誠を誓い、援軍の要請の際には大軍をもってそれに応えた。

さらに、Andaya はのべていないが、第3に、シリ viewpoint でみれば、オランダ東インド会社、ボネのブギス人、アルン・パラッカの3者は、ゴワ王国という共通の敵に対峙して「シリでまとまって」連合軍を形成し、協同で戦いに挑むことができた、と解釈されうる点を指摘したい。これらは、第1は個人のシリ、第2、第3は集団のシリととらえることが可能である。また、第2の点については、ゴワ王国を相手として、カリスマ的なアルン・パラッカ配下のブギス人が彼を中心にまとまって戦争を闘ったととらえることもできる。

## 事例2 カハル・ムザカルの反乱<sup>13)</sup>

1950年代、南スラウェシでは、カハル・ムザカルを首謀とする対中央政府反乱が巻き起こった。このゲリラ反乱は、南スラウェシ全域に大きな混乱をもたらした。

Anhar Gonggong は、カハル・ムザカルの人生においてシリ精神が彼の行動、哲学、言語を深く規定していたとのべている。カハルは中央によって傷つけられたシリがあまりに大きかったため、彼を14年間にもおよぶ執拗なゲリラ戦に走らせたという [Anhar Gonggong 1992: 58-71].

先ほどあげた Errington のインフォーマントは、「メンバーのうちの1人のシリが傷つけられたり、その人がシリを護ろうとしているときに、その人を助けないことは恥ずべきことだ」と語り、その例としてカハル・ムザカルをあげている。「カハル・ムザカルは、中央政府にシ

---

13) Kahhar Mudzakkar (1921-65, ルウ地方の平民階層出自のブギス人) による対インドネシア中央政府反乱。カハル・ムザカルは1945-50年の共和国の対オランダ独立闘争でジャワにおいて南スラウェシからの部隊を指揮し、共和国側に貢献した。しかし、国軍人事でその貢献が報われず1951年に反乱を開始。1953年にダルル・イスラム運動に参画、1957年にはブルメスタ運動に支持を表明。この頃からゲリラ勢力は弱体化し、1965年東南スラウェシでカハル・ムザカルは国軍に銃殺された。

りを傷つけられたから、彼とその仲間たちは南スラウェシのすべての人びとを護るために闘ったのだ。だから、カハル・ムザカルの闘いに加わらないことは、多くの人びとが恥すべきことだとみなした。」[Errington 1989: 149].

1953 年、ルウ地方で大きな影響力を保っていたカハル・ムザカルの盟友アンディ・テンリアジェン (Andi Tenriadjeng) が四面楚歌のなか戦死した。このときカハル・ムザカルが援軍を送らなかったことは、ルウの人びとを失望させ大きな反発を招いた。カハル・ムザカルの反封建的姿勢とも相まって、とくに貴族層のあいだでは「カハルはシリの紐帯を断ち切った」とさえみなされたという [Magenda 1989: 625-626].

ここまでの記述を検討すると、この反乱は指導者カハル・ムザカルとその仲間のシリを傷つけた中央政府に対して、彼らがひとつに結集して闘いを起こした、と解釈することも可能であろう。

新聞記事を調べていると、サッカークラブの鼓舞や政治的な場面において、シリ (やパッチェ) が使われていることがあった。以下は、そうした新聞記事を取りあげ、検討してみたい。

### 事例 3 「プロ意識とシリーパッチェのあいだ」 [Ujungpandang Ekspres, December 14, 2005]

スポーツ欄の論評。マカッサルのサッカークラブ PSM<sup>14)</sup> において「よそ者」の選手が次々と他のクラブに移籍している状況を嘆き、彼ら「よそ者」と地元出身選手の素質について論じている。

PSM は、「よそ者」選手に「恥」をかかされた。果たして「東方の雄鶏」<sup>15)</sup> はよそからの選手なしでも躍進できるのだろうか？

昨年度 PSM と契約したにもかかわらず、すぐにメナドのクラブにもどってしまった SM のことを覚えているだろうか？ ジャワからやってきた S もそうだ。ブルガリア出身の RF やカメルーン出身の AH も、PSM より契約金が高かった他のクラブに移ってしまった。たしかに、彼らはプロ選手だから、より待遇のよいクラブを選ぶのはもっともなことだ。しかし、彼らは地元っ子 (putra daerah, Ind.) でない。だから南スラウェシのシリーパッチェの精神も知らない。元 PSM 選手の GH は「よそからの PSM 選手はプレーの質をもとめる姿勢が強いのに対し、地元出身の選手は郷土の魂 (semangat kedaerahnya,<sup>16)</sup> Ind.) を大切にしているように思う。」とのべている。(中略) よそからの選手を起用するかしないかは、マ

14) Persatuan Sepakbola Makassar (Ind.) の略。

15) 原文は Ayam Jantan dari Timur (Ind.)、17 世紀前半海上交易によって隆盛を極めたゴワ王国を当時のオランダ人が形容した雅語。ここでは、PSM をさす。

16) kedaerahannya の誤記と思われる。

ネージャー次第だ。だが、PSMは地元っ子の選手だけでも、躍進できる可能性は十分あるのではないか。「地元出身の選手はたしかに経験が乏しい。だけれど、機会さえあたえられれば、精神力の強さをもってかならずや能力を発揮する。」と元PSMイレブンのARは語った。

「よそ者」の選手はプロ意識が強くプレーの質を重視するのに対して、「地元っ子」の選手はシリの精神をもつことがのべられている。表題のシリパッチェは、GHの語った「郷土の魂」を記者が読み替えたものと思われる。つまり、ここでは、よそ者と地元っ子を差異化するコードとして「シリパッチェ」や「郷土の魂」が用いられている。そして、あたかも地元の選手にはシリパッチェの精神があるからこそ、その精神力を発揮してチームの躍進をうながしているように感じられる。上であげた以外にも、PSMの奮起をうながす記事はスポーツ欄においてしばしば掲載されており、そこではたびたびシリ（＝パッチェ）が登場している。<sup>17)</sup>

#### 事例4 「アディプラ (Adipura) 賞を逃したのはわれわれすべてのシリだ」 [Fajar, June 10, 2007]

記事の内容は、マカッサル市が2007年度の「美しい都市コンクール」(アディプラ)賞<sup>18)</sup>で敗れたことについての、地元の有力者による論評である。

彼は、マカッサル市がコンクールに敗れ、汚いと評価されたことは悲しいことだとのべている。そして「どの地域の出身であっても、われわれはマカッサル市民としてそのような評価を『シリ』としなければならない」と主張する。「この失敗は、むしろ来年の競技会で必ずや入賞するようわれわれが努力するための里程標とされなければならない」とつづき、市当局によって展開されている「マカッサル市浄化キャンペーン」に関連づけて市民ひとりひとりが街をきれいにしようという認識をもつことが肝要だと結んでいる。

ここで注目すべきは、シリが共有される社会的な関係の範囲である。ここでは「どの地域の出身であっても」という文言により、特定の民族集団ではなく、マカッサル市の住民である「われわれ」が強調されている。つまり、まとまるシリの範囲はマカッサル市民である。また、アディプラ賞を勝ち取れなかったという「われわれ」マカッサル市民の汚名のシリ＝「恥」を転嫁して、来年は「名誉」を獲得できるよう促すという、コインの裏から表へのシリの読みかえがおこなわれていることも読みとれる。

17) たとえば、「シリパッチェの気概をしめせ」というタイトルの記事があり、PSMを鼓舞する内容であった [Ujungpandang Ekspres, April 5, 2006].

18) インドネシア政府主催で毎年おこなわれる美しい都市を選ぶコンテストにおいて、第1位に輝いた都市に対してあたえられる賞与のこと。

このほかに、ブギスの航海・造船技術を調査した研究によると、船主 *punggawa* (*Bug. Mak.*) と船子 *sawi* (*Bug. Mak.*) の関係において、互いのシリ＝尊厳を尊重する態度がみられたという。<sup>19)</sup> そして彼らの関係はしばしば一生涯つづく場合もあり、その場合両者の関係はひじょうに強固かつ密接なものであったという [Ammarell 1999: 199-217]. 「シリでまとまる」という言葉にはふれられていないものの、船主－船子関係の記述にこの概念をあてはめると、船主を中心にまとまる船舶集団が立ち現れよう。<sup>20)</sup>

## 6. お わ り に

本論では、シリをめぐるこれまでの議論を概観したうえで、先行研究ではほとんど指摘されていなかった、シリが親族以外のより広い社会関係において作用する点について考察するため、ここまでいくつかの事例をあげてきた。最後に、そうしたシリを核とする集団について考察を加え、さらにブギス－マカッサルにみられる行動・態度との関係についても言及したい。

前節でとりあげたシリがたちあられる文脈に関わる 5 つの事例を検討すると、これらは、親族だけでなく、船員、サッカーチーム、同郷者、民族集団、王国、戦乱・反乱への参加者など、実に多様な社会関係、集団との関係でシリが作用していることをしめしている。また、人びとがその時その場の状況に応じながら、可変的に「シリでまとまって」行為集団 (*action group*) を形成していると考えられる。<sup>21)</sup> これは、シリが侵害されたときにたちあられる場合もあれば、統一歩調をとるべき場面において、その場限りの行為集団が形成されることもある。それは戦争の場合もあれば、政治スローガンのもとに使われうる場合もある。

ブギス－マカッサル社会の歴史を俯瞰すると、その時々において強い者の側につこうとし、「勝者をつねに敬う」 [Magenda 1989: 637] といった、いわば「日和見主義的」な行動、態度が、いつの時代にもみられる。それは、17 世紀のマカッサル戦争の時代から、20 世紀半ばのカハル・ムザカルの反乱期、そしてスハルト大統領の新秩序体制時代、さらに卑近には 2004 年の総選挙の際にいたるまで共通してみられる [岡本 2005]。<sup>22)</sup>

ブギス－マカッサル社会に継起的にみられる日和見主義的な行動、態度は、本論文でとりあげた「シリでまとまる集団」の概念を用いることによって、多少なりとも理解が可能となるこ

19) これと似たことを、アルフレッド・ウォーレス (Alfred R. Wallace) もマカッサルからアル諸島へのブギス帆船に乗船したときの感想として、著書『マレー諸島』のなかで記している。「船主の彼ら (船子) に対する扱いは非常によく、食事をいっしょにしていたし、話し方が丁寧でなかったことも一度もなかった…」 [ウォーレス 1993 (1869) : 159].

20) *Punggawa* (船主) の “*pu*” は「へソ、中心」を意味する接辞である [Ammarell 1999: 87, 202].

21) 行為集団とは、Freeman が用いたことばで、双系社会においてしばしばみられる親族を基盤とした集団をさす。例として、ボルネオ島のイバン社会で *bejalai* と呼ばれる、放浪集団があげられている [Freeman 1961: 213].

22) 岡本は南スラウェシ州出身のユスフ・カラ副大統領の言葉をひくかたちで「機会主義的」と表現している。なお、「日和見主義」ということばには否定的なニュアンスがふくまれているが、本稿ではブギス－マカッサルについてそのような意図をもっているわけではないことを断っておく。

とを筆者は主張したい。すなわち、ブギスマカッサル人は、その時その場の状況に応じながら、可変的に「シリでまとまって」行為集団を形成し、各種の状況に対処してきたと理解することができるということである。「シリでまとまる集団」は、親族、同郷者、クライアント、船主一船子、民族集団、戦争・反乱への参加者など、実に多様である。したがって、複数の異なる種類の「シリでまとまる集団」が同時並行的に形成され、かつ1人の人間がそれらに同時並行的に参加している状況が考えられる。これらの集団に共通しているのは、ただ1点、すなわち「1つのシリ」を共有していることであり、このシリを中心に行為集団が形づくられていることである。

以上でのべたシリを核とする行為集団に関する考察は、すべて文献資料に拠るものである。今後は参与観察にもとづく長期間のフィールドワークをとおして、人びとの日常生活の側面から、ブギスマカッサル人のシリの様態、かつシリとかれらの行動・態度の関連についてさぐりたい。

## 謝 辞

本稿は京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科に提出した博士予備論文（修士論文相当；「インドネシア・ブギスマカッサル社会における『恥一名誉』の概念に関する再検討」2007年12月）を一部書き直したものである。杉島敬志先生には博士予備論文と本稿の執筆の過程で全面的なご指導を賜った。また、ブギスマカッサルを対象として人類学的研究を続けてこられた首都大学東京の伊藤真先生、京都大学東南アジア研究所の濱元聡子氏には、博士論文閲覧の許可のみならず、有益なご助言をいただいた。また、2007年5月に南スラウェシ州都マカッサルにて資料収集をおこなった際は、日本学術振興会「魅力ある大学院教育イニシアティブ：臨地教育研究による実践的地域研究者の養成」の支援を受けた。記して深謝いたします。

## 引用文献

- Ammarell, Gene. 1999. *Bugis Navigation*. New Haven: Yale University Southeast Asia Studies Monograph 48.
- Andaya, Leonard Y. 1981. *The Heritage of Arung Palakka: A History of South Sulawesi (Celebes) in the Seventeenth Century*. The Hague: Martinus Nijhoff.
- Anhar Gonggong. 1992. *Abdul Qahhar Mudzakkar: Dari Patriot Hingga Pemberontak*. Jakarta: Gramedia Widiasarana Indonesia.
- Brawn, David M. 1993. *Immanent Domains: Ways and Living in Bone, Indonesia*. Ph.D. Dissertation, Michigan: University of Michigan.
- Cense, A. A. 1979. *Makassaars-Nederlands Woordenboek*. 's-Gravenhage: Martinus Nijhoff. (Cooperated with Abdoerrahim.)
- Chabot, H. Th. 1996 (1950). *Kinship, Status and Gender in South Celebes*, translated by Richard Neuse. Leiden: KITLV Press. (Originally as *Verwantschap, stand en sexe in Zuid-Celebes*. Groningen and Djakarta: Wolters.)
- Davies, Sharyn Graham. 2007. *Challenging Gender Norms: Five Genders among the Bugis in Indonesia*. Boston: Thomson Wadsworth.

- Errington, Shelly. 1977. Siri', Darah dan Kekuasaan Politik di dalam Kerajaan Luwu Zaman Dulu, *Bingkisan Budaya Sulawesi Selatan* 1(2): 40-62.
- \_\_\_\_\_. 1989. *Meaning and Power in a Southeast Asian Realm*. Princeton, N.J.: Princeton University Press.
- Freeman, J. D. 1961. On the Concept of the Kindred, *The Journal of Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland* 91(2): 192-220.
- 濱元聡子. 2004. 「島嶼間移動をめぐる社会史的な地域研究：〈しま〉模様の海」京都大学大学院人間・環境学研究科博士論文.
- Hamid Abdullah. 1985. *Manusia Bugis Makassar: Suatu Tinjauan Historis terhadap Pola Tingkah Laku dan Pandangan Hidup Manusia Bugis Makassar*. Jakarta: Inti Dayu Press.
- 伊藤 眞. 1993. 「南スラウェシの犯罪と慣習」須藤健一他編『オセアニア 2：伝統に生きる』東京大学出版会, 225-237.
- \_\_\_\_\_. 1996. 「逃げる男女：南スラウェシ, ブギス＝マカッサル社会における駆け落ちの諸相（覚え書き）」『人文学報』271: 81-110.
- La Side. 1977. Beberapa Keterangan dan Petunjuk Tentang Pengertian dan Perkembangan Siri Pada Suku Bugis, *Bingkisan Sulawesi Selatan* 1(2): 25-39.
- Leo Suryadinata, Evi Nurvidya Arifin and Aris Ananta. 2003. *Indonesia's Population: Ethnicity and Religion in a Changing Political Landscape*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.
- Magenda, Burhan Djabier. 1989. *The Surviving Aristocracy in Indonesia: Politics in Three Provinces of the Outer Islands*. Ph.D. Dissertation, Ithaca: Cornell University.
- Matthes, B. F. 1874. *Boeginesch-Hollandsch woordenboek, met Hollandsch-Boeginesche woordenlijst*. 's Gravenhage: Martinus Nijhoff.
- マトウラダ. 1980. 「ブギス＝マカッサルの文化」クンチャラニングラット編『インドネシア諸民族の社会・歴史・文化』加藤剛他訳, めこん, 316-339.
- Mattulada. 1995 (1985). *Latoa: Satu Lukisan Analisis terhadap Antropologi Politik Orang Bugis*. (Second edition) Ujung Pandang: Hasannudin University Press.
- M Ide Said. 1977. *Kamus Bahasa Bugis-Indonesia*. Jakarta: Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa, Departmen Pendidikan dan Kebudayaan.
- Millar, Susan B. 1983. On Interpreting Gender in Bugis Society, *American Ethnologist* 10(3): 479-493.
- \_\_\_\_\_. 1989. *Bugis Weddings: Rituals of Social Location in Modern Indonesia*. Center for South and Southeast Asia Studies Monograph No. 29. Berkeley: University of California.
- Nurul Ilmi Idrus. 2005. Siri', Gender, and Sexuality among the Bugis in South Sulawesi, *Antropologi Indonesia* 29(1): 38-55.
- 岡本正明. 2005. 「5年おくれの『改革』：2004年インドネシア・南スラウェシ州におけるゴルカル党の凋落」『アジア研究』51(2): 62-82.
- Pelras, Christian. 1996. *The Bugis*. Oxford and Massachusetts: Blackwell Publishers.
- Rusly Effendy. 1977. Tinjauan terhadap Peristiwa-peristiwa Penganiayaan dan Pembunuhan dalam kota Madya Ujung Pandang, *Bingkisan Budaya Sulawesi Selatan* 1(1): 34-57.
- ウォーレス, A. R. 1993 (1869). 『マレー諸島 (下)』新妻昭夫訳, 筑摩書房.

## 新聞

- Fajar. 2007 (June 10). Kegagalan Raih Adiura, Siri' Kita Semua.
- Ujungpandang Ekspres 2005 (December 14). Antara Profesionalisme dan Siri'na Pacce.
- \_\_\_\_\_. 2006 (April 5). Tunjukkan Semangat Siri Na Pacce.